も頻度の高かったのは、ビールの醸造に関する利害であったという実証は、十六世紀以降の都市と農村の関係をテーマとする研究者にとって興味深い。

本書の特色となる第三の要因は、ブラシュケの史観である。東ドイツの史家である彼には、マルクス主義に立つ史観が要求されているであろうにもかかわらず、本書におけるその表現は極めて原則的、かつ希薄でしかない。周知のように、宗教改革時代を特徴づけるマルクス主義史観に基く基本概念は、「初期資本主義」、また「初期市民革命」であり、東ドイツの学界では、それらはシュタインメッツのいわゆる「初期市民革命のテーゼ」に示されるように、今日では相当程度に厳密に定義されているはずである。たしかに、ブラシュケは、「初期資本主義」なる概念を本書のライトモチーフとして用いているが、叙述の詳細はすべて、実証的に構成される論理だけに基いて書き進められている。彼の用いる「初期資本主義」は、資本と労働の分化が原則的に認められるという程度の意味を越えるものではなく、また、その用語は宗教改革時代の社会全般の性格を大局的に表現する場合にのみ使用されているように思われる。このような用法は、もちろん、ブラシュケひとりにとどまらず、今日のマルクス主義史家のなかに明確な潮流として認められる動勢である。そして、その現象は、農民戦争と宗教改革の研究をめぐる東西世界の史観の長い対立的な相互作用から派生した、マルクス主義史学の今日的な一局面の表現と考えることができる。なお、訳者の解題を借りて付言すれば、ブラシュケの東ドイツにおける史家としての境遇はいくらか微妙であるという。

以上に紹介したように、本書が備えている三つの特色は、いずれも宗教改革史研究が直面している現況と密接な結びつきをもっている。本書はそのような意味で、興味深い啓蒙書である。

（四六版　三一三頁　一九八一年七月
ヨルダン社　二八〇〇円）

（永田諒一　岡山大学講師）

アイザィア・バーリン著
小池　銓訳
『ヴィーコとヘルダー
——理念の歴史：二つの試論——』

本書は、Sir Isaiah Berlin, *Vico and Herder: Two Studies in the History of Ideas*, 1976 の邦訳であるが、著者バーリンについては、いくつかの邦訳も刊行され、今更紹介を加える必要もないであろう。ただ本書に関して一言すれば、ここで取り扱われるヴィーコとヘルダーは、彼の十指に余る思想家研究の一部であり、その中でも特に優れた一部である。ここで優れたという評価を下す理由は、単に二人の思想家の厖大かつ晦渋な著作を手際良くまとめ上げた事に依るものでも、問題点を浮彫にする行論の鮮かさに依るものでもない。むしろ本書の特色は、バーリンの叙述の下敷となり、二人の思想家に対する鋭い切り込みを可能にしている彼の基本的な眼にこそ求められるべきである。序説においてバーリンは次のように述べている。

「観念というものは真空の中では生れな

いし、単性生殖でも発生しない。社会史の知識、特定の時代、場所において働いていた社会的諸力の衝撃や相互作用の知識、またそれらの産む諸問題についての知識、完全に技術的な学問以外のあらゆるものの意義と目的とを十分に評価するにはこれらの知識が必要である。いや今やある人びとの告げるところでは、厳密な科学の諸概念を正確に解釈するのにさえ、必要なのである。またわたくしは、これら第一級の重要性を持つ独創的観念の生れたのが、両シチリア王国、あるいは東プロシア、通常かの活潑な知的科学的活動の時代における文化的後進地域といわれる処であったのは何故か、その理由を考察することの重要性を否定する気も全くない。これは歴史上の一問題であり、その解決には社会状態、イデオロギーや理知の状態についての知識が明らかに不可欠であり、わたくしの知る限り、未だに十分討究されたことのない問題である。それでも本書の論文の目的とするところとは直接の関係はない。そして、十全の理解の為には右のような歴史的取扱いが求められるとしても、あらゆる歴史上影響の大きかった学説や概念の核心を把握するのに、それが必要条件であるということにはなり得ないのだ。」（本書、一〇―一一頁。以下頁数のみ表記。）

バーリンは、思想に対する歴史的取扱いを「歴史的解釈学」と命名し、過去の諸観念を討究するに際して、ふんだんな文化・言語・歴史の脈絡の中に潜っていなければ有効な討究ではあり得ないという考えに疑問を呈しながら、究極的に過去の思想家の重要性は、「結局、彼らの提起した問題が今も尚（あるいは今日再び）生きた問題であり、かつこの両者〔ヴィーコとヘルダー〕の場合の如く、その問題が胚胎されたナポリやケーニヒスベルク、ワイマールの社会の消滅と共に滅び去ることがなかったという事実に在るのである」（一二―一三頁）と述べている。

生きた問題という観点から第一級の重要性を持つ独創的観念を、ヴィーコについては七つの、ヘルダーについては三つの命題に論点を絞り込みながら、バーリンはその一つ一つを紹介し検討していく。それぞれの問題について細部に亘って論じる余裕がないので、ここでは筆者の眼にとまった二つについて述べてみたい。

第一点は、ヴィーコの知識論の知的源流に関する問題である。従来、ヴィーコ研究者のニコリーニ、コルサーノ、あるいはバダローニ等は、これをヴィーコ自身の社会的・知的環境たる一七世紀のナポリ王国に求めた――とりわけバダローニは、当時のナポリの科学思想上特異な位置を占めるカラムエルと調査研究者協会の思想を発掘し、ヴィーコの哲学の全体は調査研究者協会の実験的方法と、精神の形而上学とを、市民の哲学（即ち、社会・政治哲学）の面に移行するものと解すべきであると結論した――事に対して、バーリンは強く反対する。歴史と社会科学とは蓋然性で満足しなければならぬという事は、ヴィーコ以前の人々もほとんど誰一人疑わなかった常識であって、「ヴィーコをこの陳腐な見解に集約してしまうのは、彼をごく小粒な経験論者の水準におとしめることに他ならない」（二四〇頁）からだ。加えてヴィーコの思想の核心にある二つの世界――摂理によって定められた限界内においてのみ我々に操作可能な、ままならぬ外部世界と、人間の創造的精神が作り、彼らの集団的意識に再三甦るイメージ・意味・象徴を具えた人間世界、

そこにおいてのみ我々は真の市民であり、その歴史の流れにおいてのみ我々が安住できる世界――の区別と対照を説明してくれていないからである。

そこでバーリンは、ヴィーコと旧来の思想との掛け橋を法学の歴史に求める。ヴィーコは何よりも先ず、法学の歴史とりわけローマ法の歴史に専心した法学者であったという事実から出発し、歴史法学者、特にオットマン及びボードゥアンとヴィーコとの間には、(1)叙述体の歴史に対する不信、(2)自然法にせよ後のデカルト主義にせよ、時間を超えた原理に対する反感、(3)言語学を一種の基礎人類学、社会心理学として信頼する事等、基本的にも細部についても、アプローチの類似を見る事ができると述べる（二五九頁）。この点でバーリンは、ヴィーコ研究者の盲点を見事に衝き、ヴィーコの知識論の知的源流という問題に新分野を拓いたと言い得るであろう。

第二点は、ヴィーコの知識論に対するバーリンの解釈の特殊性である。バーリンによればヴィーコの知識論の重要性は、旧来の知識の三分類法――理性的直観か信仰か啓示かに基づく形而上学的あるいは神学的知識、経験的観察に基づき、仮説・実験・帰納推理その他自然科学の手法により精練・拡張される知覚的知識――に新しいタイプの知を付け加えた事にある。それはある種の自己知識、行為者としての我々の活動を我々自身で知る事であり、しかもその際の動機や目的、その前後の連続した社会生活等を、内側から想像的に理解する事である。バーリンはかかる歴史的知識と自然的知識の区別と、前者の後者に対する優位の強調によって、ヴィーコが「Naturwissenschaft（自然科学）対 Geisteswissenschaft（精神科学）の方法と目標――自然科学対人文科学、Wissen（知る）対 Verstehen（理解する）の対立を、始めて定式化した」（七二頁）とまで述べている。

しかし、自然科学と社会科学の方法論的二元論の始祖をヴィーコに認めようとするバーリンの解釈は、実証的に見て妥当だと言えるのだろうか。ヴィーコは良く知られているように一七〇七年まで明らかにカルテジアンの影響を強く受けていたが、この年にベーコンの著作に接し深く傾倒する。自ら『自伝』の中で「ヴィーコは『ノーウム・オルガーヌム』のベーコンのような人間になりたいという希望を抱いた」と書き記し、『新しい学』第一巻第二部第二二命題の中では、諸民族の世界を事実において見る眼をベーコンに負っていると告白した後、「ただし対象はベーコンが『思維と観察』でとりあげた自然現象から人間文明へと移されねばならない」と明言している。にも拘らず、ヴィーコの知識論はベーコンの経験的方法とは全く別の基礎に立ったものだとバーリンは見ているのだが、筆者はバーリンの興味ある解釈には敬意を表しながらも、そこまでの明確な区別を読み取る事に若干の戸惑いを覚える。更にこの区別を方法論的二元論と結びつけ、「理解――ディルタイその他の人びとが Verstehen と呼んだもの――という概念は、事実上ヴィーコが発明したといっていい」と述べるに至っては、現実の過去への投影が実際に存在した以上のものを浮かび上がらせているように思える。

だが、バーリンにとってはこの点がヴィーコとヘルダーの二人の思想家に共通している重要な思想的核心と関わり、両者を連続的に捉え、反啓蒙主義の始祖と旗手とし

てより広い思想史の流れに定位し得る一つの理由となっている。想像力によって過去の生の諸形式を、その現実に在った形ではないまでも、少なくともその在り得たであろう形に再構成する事の重要性を強調する事で、両者は大幅な人間精神の拡大への扉を開いた。ヴィーコにおいてはデカルトの理性偏重に抗う事によって、ヘルダーにおいては啓蒙主義が前提とする人間精神の普遍性に抗議の声を上げる事によって、十九世紀のロマン主義、歴史の世紀を先導する諸原理を、十八世紀において準備したのである。この反啓蒙主義という思想史上の流れを十八世紀の啓蒙時代の伏流として位置づけようとするバーリンの構図の当否如何は、二人の思想家を離れて一段上昇した高みから、検討していく必要があろう。

最後に訳について気付いた点に触れておきたい。「反対改革」(四五頁)、「Wissen (知る) 対 Verstehen (理解する)」(七三頁)、「ナイーヴ」(一一九頁)、「コンスタンティヌスの『贈与の辞』」は、それぞれ「反宗教改革」、「Wissen (知解) 対 Verstehen (理解)」、「素朴な」、「コンスタンティヌスの寄進状」ではないだろうか。加えて、註の外国語文献をすべて訳出してあるのは、読者に如何なる利便を与えてくれるのだろうか。

ともあれ、時間の侵蝕を未だに拒否し続けている二人の卓越した思想家の諸命題を、バーリンに導かれて旅する事は、無上の喜びであると信ずる。

(四六判　四一〇頁　一九八一年八月
みすず書房　三八〇〇円)

(芝井敬司　京都大学助手)

会　告

昭和五十六年度史学研究会大会および総会は、予定通り十一月二日(日)午後一時より楽友会館において開催されました。公開講演は小林健太郎、島田虔次の両氏により左記の演題で行われ、盛会裡に終りました。

戦国末期土佐国の地方的中心集落　小林健太郎氏

極東思想史における三浦梅園　島田虔次氏

なお、大会と総会に先立って開催された秋季定例の理事評議員会において次の各氏の役員退任ならびに新任が承認されました。

退任　理事、今津晃　島田虔次　間野潛龍(死亡)。評議員、市川承八郎(死亡)　小畑龍雄　谷岡武雄　護雅夫。

新任　理事、梅原郁　狩野直禎　樋口謹一。評議員、茨木慶三　愛宕元　河内良弘　勝藤猛　木下良　桑山正進　田村満穂　西谷真二　前川和也　森正夫。

(理事・評議員間の移動については省略)